

楠隼中高と東京大学工学部との交流会

高校宇宙部も参加

3月8日、楠隼中学校・高等学校で、東京大学工学部航空宇宙工学科の学生14人を迎えた交流会が行われた。この交流会は、新型コロナウイルスの影響で中断していたが、数年ぶりの開催となった。

交流会は午前11時から午後1時までの2時間という短い時間だったが、参加した生徒は貴重な経験をすることができた。交流会の冒頭で、楠隼中高と東京大学それぞれの紹介があり、その後、いくつかのグループに分かれて意見交換が行われた。

宇宙部は、缶サット（模擬人工衛星）を中心とした技術的な質問を東大生に投げかけ、より専門的な助言をいただいた。東京大学でも缶サットを製作しており、情報共有の良い機会となった。参加した生徒からは「普段聞けない話を直接聞くことができ、とても良い経験になった」との声が上がった。

今回の交流をきっかけに、来年、再来年も継続して行われ、これからの楠隼の特色の一つになっていくことを期待したい。

天体観望会（3月3日 皆既月食）

2026年3月3日18時50分頃～20時30分頃、楠隼の校庭で皆既月食の天体観望会を行った。高校宇宙部員のほか、先生方や卒業式を終えた退寮前の高校3年生が集った。今回の月食は、東の空に昇り始めるとすぐに欠け始め、20時4分には皆既となり、とても観望しやすい時間帯であった。

楠隼にありながら長年使用されていなかった反射望遠鏡、屈折望遠鏡を整備して使用した。そのほか、部員個人の望遠鏡や双眼鏡、一眼レフカメラも用いて観望を行った。

当日の天気は全国的には曇りだったが、肝付町では晴れ間が広がり、綺麗な月を眺めることができた。皆既になると、オレンジがかかった赤い月が夜空に浮かび、その様子が「思ったより赤い」「感動的」と魅了され、普段とは違う不思議な月を観望できた。

次に日本全国で皆既月食を見ることができるのは、2029年1月1日で、年が明けるとすぐに（0時7分）月が欠け始める。

今年度も宇宙部では天体観望を行いたい。ぜひ、中学生からも希望者を募り、中学宇宙・技術部の反射望遠鏡も使用するなど、より活発的な活動にしていきたい。楠隼生には宇宙に興味・関心のある生徒も多く、個人的に望遠鏡を所有している生徒もいる。将来的にはより多くの希望者を集めた観望会の機会を期待したい。皆さんにも、ぜひ満天の星空を見上げる感動を味わってもらいたい。

新入部員の意気込み

今年度の宇宙部の新入部員（日南陽一さん）に、意気込みを語ってもらった。「初めまして。今年度から新入部員として高校宇宙部に入部させていただきます、日南（ヒナミ）です。」

高校宇宙部は、僕が楠隼中学校を受験した一番大きな理由でもあり、こうして無事に入部できたことをとても嬉しく思っています。（3年間、この時を楽しみにしていました。）

僕は宇宙、特に宇宙工学が大好きです。どれくらい好きかというと、親から聞いた話では、2〜3歳の頃にはすでに拙い発音で「スペースシャトル」と言っていたそうです。自分でも、なぜここまで宇宙に惹かれるのかは分かりませんが、かなり強い興味を持ち続けています。宇宙部では、父の影響で学んできた3DモデリングやC言語によるプログラミング、Linuxの知識を活かし、技術系全般を担当したいと考えています。幼い頃は父の持ち物を分解してよく怒られていましたが、その経験も今の興味につながっていると感じています。宇宙部で挑戦したいことは、以下3つです。

- ・缶サットの制作
 - ・100g未満の自律飛行UAV（Unmanned Aerial Vehicle 無人航空機）の開発
 - ・小型ハイブリッドロケットエンジンの開発
- これらを短い高校生活の中で実現できるように、全力で取り組んでいきます。よろしくお願ひします。」

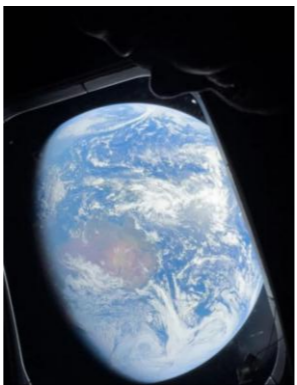
身近な宇宙

半世紀ぶりの月有人飛行

2026年4月2日、アルテミスIIミッションのSLSロケットがケネディ宇宙センターから打ち上げられ、4名の宇宙飛行士を乗せたオリオン宇宙船「インテグリティ」が宇宙へ向かった。アルテミスIIはアポロ17号以来約半世紀ぶりとなる有人月周回飛行であり、アルテミス計画における最初の有人ミッションである。

打ち上げ後、オリオンは近地点・遠地点を引き上げマヌーバを完了し、月へ向かう軌道へ移行した。6日には月面から約4,000マイルの距離でフライバイを実施し、通信ブラックアウトを経て地球との通信を回復した。また、飛行中に地球からの距離が25万マイルを超え、人類史上最遠の有人飛行記録を更新した。

4月10日現在、オリオンは自由帰還軌道に乗り、地球への帰還フェーズに入っている。アルテミスIIでは、生命維持装置、航法、耐熱シールドなど、将来の月面着陸ミッションに不可欠な技術の有人環境下での検証が行われている。これらの成果は、次のミッションであるアルテミスIIIにおける有人月面着陸の実現に向けた重要なステップとなる。



画像：NASA

宇宙からのささやき

～何度も私は月の上で独り言を言った。これは月で、あれは地球だ。私は確かにここにいるのだと。～

アラン・ビーン

NASAの宇宙飛行士、技術者。1969年11月、人類で4番目に月面を歩いた。

宇宙の声

昨年度、宇宙部は多くの活動や大会に参加し、貴重な経験を積むことができた。

特に、一学期の「衛星設計コンテスト」、二学期の「宇宙甲子園・缶サット部門」および「ロケット部門」への出場、そして三学期の「鹿児島ハイブリッドロケット打上げ」への参加は、部全体にとって大きな成長となった。

これらの活動を通して、部員それぞれが技術力だけでなく、課題に向き合う姿勢やチームで協力する大切さを学び、部としての結束がより強まったと感じている。また、実際の現場に触れることで、宇宙開発の奥深さや難しさを実感し、今後の活動への意欲も一層高まった。

これらの活動を実現できたのは、顧問の先生をはじめ、鹿児島大学・第一工科大学・九州工業大学の学生や先生方、肝付町の皆さまなど、多くの方々からのご支援とご助言のおかげであると強く感じている。

今年度も「宇宙甲子園・缶サット部門」への出場を予定しており、すでに構想づくりと製作を進めている。昨年度よりさらに進化した缶サットをお見せできるように、昨年の反省を生かしながら計画的に取り組んでいきたい。

←NASAのアルテミスIIミッションの乗組員をのせた宇宙船が4月10日にカリフォルニア沖の太平洋に着陸した。今回のミッションでは、初の女性、初の有色人種、初の国際パートナー宇宙飛行士（カナダ人）が月に滞在した。（画像：NASA）

